新板[illegible]

宗祇廻国[illegible] 絵入

共五

案五

特別
ル3
3364
5

第一号

門 ろ
號 3364
巻 5

山崖嘉八

昭和二七年一月二八日
購求

文庫

四国雑記 下

あるは旅宿にて二千首のうちに[illegible]よみやるとき

暁更雪

さそふ木もなく[illegible]秋ならず
もとあけゆく志ののぬれゆき

雪中鷹狩

ふりしよ[illegible]のしるしたれとらは
志らふのしるよ[illegible]とやまてらん

池水鳥

いけのまつかねとやよれにそ
うきれ月のうけおもくん

契二世戀

しづむつきのちぎりもしらでこの世川
みちしきじとちぎるもろのき

ある夜ふるさとの人とあふとみてさめてのち。
おもひつゞけゝれば

客牀夢覺テ故人歸ル空夜悽然トシテ獨リ濕ス衣ヲ
不識ラ同期其ノ底ノ日ソ洛陽千里信音稀ナリ

十五の時まで三十首のうたを続し侍りけるよ

冬地儀

としもへてあめのうちよりいろかはる
たまきはるこの六のちきりえらまん

月前雪

すむ月の光にまよひて見えつるや
おち里をふれゆくゆきのしたみち

浪上千鳥

綱人のうけのうきまとよそにみて
みなとのもとまとひくあと続うき

初契縁戀

たまさかに風のたよりにはつあふぞ
かのむすびし川いもせのえん

おもひ寝ざめのてるまくらずり燈をかゝげて嘯きして

寒燈挑ケ盡ス夜沉々。獨リ臥ス空牀ニ思ヒ不禁セ。

為ニ我カ詩神如シ有ルカ感。松風生シ砌ニ助ク愁吟ヲ

雪のあしたあるかたの閣にのぼりて偶作

危樓朝ニ上テ百花鮮ナリ交友無シ憐ム詩酒ノ莚ヲ

此ノ地逍遥似タリ何ノ處ニ乱山畳嶂雪ト嬋娟。

十五日同宿。十佛とよへる人と連歌に数寄ありて。

切にもよ。異行しけるをもちんかある時。発句所望し

かれこし

ゆつりはの山かつらして雪おもし

人々十五首のうたよみ侍りけるに

河千鳥

とね川かせさえぬらんゆふさくら

こほりとゆくるさゝなみかゝる那

懸樋氷

しるのさへやいでゝその名はあれは

うけひのみもこほりとちけり

燈火似春

うづみ火の灰りきえけてもの春を

もろのひらとはる梅せり

懐旧歌樂

せきぬるこゝろのまのそのさはゆへ

人のゆくゑをもちつれやせん

山海戯書

ゆふさりこのあそこのみさとゝへたてまて
山のはもみえわかぬね月おちて
孫夫嵗ゟいつしかかはりて式にて雪月の夜
寒梅に對して偶作
歳云晩息若吾何白髪蒼顔愁又加
風雪還如慇旅懐野梅映月影横斜
野老沢といへる所へ拝借に向ひしに猫のやうなる草菴
西伐。観る事まてざれとも とくいふしかるへ
とへるものなりしが あかるるとそれ。遊諧
旅あそびのさかゐよ山のはをへて
なかりしと見るもとゝかざるも

けふこそはすぎてくるしくはとしふるにつきのあふ
みの井のもとも行てでたゝこの川とくゝりてあさゆふ
よろる行まとちかんやくされど
きと人の心おくしく川と中くまよ
まうちそくそのこゝろそも見
ある夜ちこゝそのあとに隣国より来るいあらそ。
とふらひ来りて酒宴のひまよ。二十そのゝこぞすみ
行る中よ

擁路雪

とりたぐむこゝ行をたづかのあとまて
ひろみよたくゞ中さとの志てしだ

深夜寒月

ふけゆくにつれぬ夜すがらさゆる月の
こほるまでさけぞ人のそらなは

惜歳暮

おいのなみよるぞはかなきうつりゆく
としのくれにもおしまざらなん

祈不逢恋

つれなしと人をうらみてゆふぐれの
かねにもなびかぬ神やうらまん

述懐涙

うき身のこしとめてそのふくへとりさすなよ

わさまでもとしふるまでとたのみなる
あらはとぞすぎゆくかたの雲霧に落ゆく日くるれ
つらぬのこころふかくすみよそらへなれん

西泊東漂分幾州　天涯流落屢吟遊
踈鐘遥度野村晩　清梵声残江寺秋

閑誦と題したるよ夜半すめ首の歌にかへならひ

宿鳥驚雪

身のすれおもろくゆれぬもさらず
ねぐらのゆきもよころうさらし

沢畔水鳥

あしのまに南をまねくしもしくに
つまをさなくて

さくらさのくもかくれもぬこゝまで

契不来戀

ちぎりしもいまこそひさしくふけゆきて
たのめしのちをまつれど程とくらし

社頭松

すみよしの千代もとききこのまつ
つきせぬあをやかにまつとこそよしん

ある人楽天の郷懐と。一絶吟じ侍りき。
而しかれど扇子にかきてつかはしける

一別長天西又東。殘生蹤跡轉飄蓬。
傍山臨水勞吟歩。詩肺辛酸難得工

こゝかれ蝸廬下にあつまりて閑吟の次よ

野徑乾草

かけろふのとゝかれたるくさせで
あさなゝこさられ雲のたつくさ

從門帰戀

うつし心萱まよふづるねのかど
あふとさとくるさでのゆの風

鶴翔天

きくぞてつら雲井にのこるあしたづの
こゝろも高くてたちまよふかな

忝身のとゞ懐ありさことと述懐して、つまつくの

武州大塚ニ住

あまたよごろ梅をたづねまゐりて、あるゆふぐれに吟じて

冷衣歩月出寒村　幽處探梅風雪昏
郷信不臻春信到　臘前惆悵憶中原

武州大塚にありける下野よりまゐりける時、近衛前関白(さきのくわんぱく)殿下(でんか)よりめしよせて御書到来(たうらい)ありけれとひとつ旅(たび)のおもひ一しほの恋慕(れんぼ)のおもひまさりて

従兼君別始看書　異國天涯千里餘
忽憶歸期涙先落　待春遊子數居諸

連日雪いとふかくふりければ、野遊の興もさめて、ひとりこもりてことにこゝろもさびしかりければおもひやりて

歳年

向来投錫掩幽扉平野陰崖片雪飛
想見舊庭殘臘底記春草木記吾悲

歳年のしをおよひつゞくたえしあさあり
さ海とものゝさるうらいとまひことゆきねのこゝろ
やもくゆうそうの早梅をきしてあそびて表乃
いとまはこゝとおもひえゆるぞうきあり

歳晏無営旅客情在身寒餓憶花京
柴扃半掩夜来雪一點梅開使我驚

たまきくのかとうつてずあ首のこゝろとこゆうゝるよ

鉢扣聞處

かるたまそゆぐまうえうそで来のゆすゞ

旅ねするあらましゆくりけり

寄関恋

ひとこゝろまづ旅ぢをこえてたゞへやは
風さへこゝろの任せならぬ

寄夢恋

人しれず枕の夢のうき川うし
うけてゆひまさゆめのしきさう

濱邊旅泊

ゆめさそうさりわれくさの波くゝらぬう
おもうゝゝのおもさは寒さえて

老後懐旧

えしへのあさとつまりぬらしを
のこゝろひとしさおいのさとうらむ

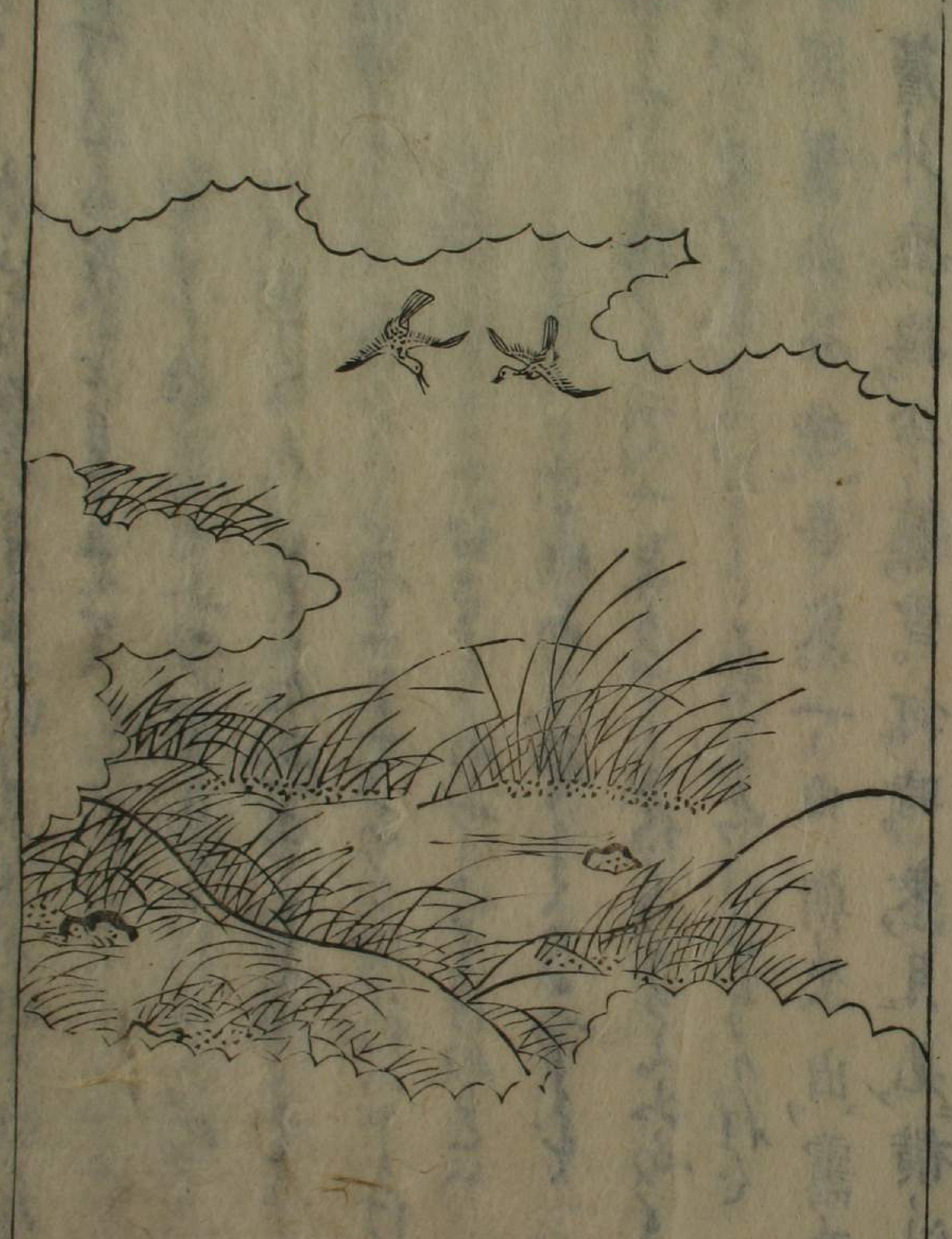
ある時古郷のあねさ作り連歌のこゝろを思ひやりて

雲路隔蹤鴻雁行。他郷何耐想家郷。
暗香吹斷故園雪。唯有梅花似洛陽。

慈色とくしく濁揉き。いつも風をとまるは。その思
おもく作り直しみ詩人墨客のこゝろをしる
たぐひならねことのこゝ。旅人まて

邊塞曾無風騒人。窓梅牆柳獨其春。
爲誰黄鳥出幽谷。淑氣迎晴一曲新。

こゝまゝ。骨肉のことわすれもゆしくおもひやり作りて



野水海ニ漂フ鴻鴈ノ影。天風頻リ動ス脊令ノ枝
春ル來テ其レ欲ス知ント歸路ヲ。舊里ノ山花落後ノ時

正月朔日試筆のうた

あつまよりくふらきさまやこて
とものきくこ綾てとれとゆらえん

今朝雪太タ降リ祝ス豊年ノ之嘉瑞ヲ裁ス短篇一
章ヲ矣

青陽朔旦ノ日。瑞雪示ス豊年ヲ料リ識ル萬
邦ノ土。歡娯正ニ决然。

あくる六日。雪いさゝか融しけれバ。武蔵野よ
いでゝ。わか菜をとりえて

むさし野はけふはなつひかな若草の
うぐひすまだねぐらのこゑしらも

はるかなるほどとて馬上にてある向行ふやりける
のなかによむさしあぶミとかけたい

さすがに名ある野なりまてあつまぞ

あるかなかて一あるすみ行るかゝ山ふかき
されども鶯もいまた声をたてさらされど

寒鶯幽谷棲ム吾家ニ。一曲朝來出ツ霽霞ニ。
簷外壓ス梅ヲ半籬雪。何ノ時カ無ク月ニ見ン横斜ヲ

むさし野よりいでゝ酒ここのもてあそびたるよげ
見えて。雲雀（ひばり）のあがるをきゝて

まちかねのひばりやしるらむむさし野は
おもひぐさも床なるらん

あさましけるに。田家の庵に。一あるじはありて行け
ければ。野壌草席なといふも皆あわれなり盛
緒にたくましく住せられけるゝ

吾ガ此ノ幽棲似タリ謫居ニ。從リ渭城ニ別テ絶ス音書ヲ。
淡雲流水隨ヒ行處ニ。自ラ爨テ黄粱ヲ手ヅカラ煮ル蔬ヲ

籬宿よ。梅のさかりなると。一枝をとりてよめる

梅かゝをやどのしるしにうつるぞの

こゝやこゝとつもるでとしことそあれ
鐘宗こゝの行ふ行うるあした気るのをけるも
そして
しるゆへふたゝの声いそしうびきも
梅ま ゆきゝや名どり田し歩
武州よぷ山宗派の播他行ら海りてずりだらら逍遥
志行ら名るよあら取筆ま海ら世行りし
一旬此地上遊軒。雲水森然山有霊。
残夜無眠聴春雨。蕭々深院短檠青。
次の東雨数して月いとあしろきまぷ新ちく梅の
かをりされど。和漢第三まで

ゆくゝよふ梅よたひ行の床ゆき
月別古郷春　漢
やゆよとくうすむくすら雪をきて
翌日雨よぷあうこあられて。那須の奥もぐるひ行く
さらされど。つきしくどぷろのきくし。むくしぐひきとぞ。
ありしてぐちすさくる
旅亭春雨日如年。坰野逍遥絶往還。
羸得嘯吟戦間緒。黄鸝交語問詩莚。
そのはあそされて。雪ふるりされど。かずしたち
まへて。鐘宗ともはらしく。行りされし
あしゆきのふりさけみまで天の京

さえてあくるのきもあさくずすしうな

すゑのかゝるまゝ。紅桜のいろことにとりしめてありさまはれ

ころぶしふくそよりなかりしはれて

うつくしきそのぬれ桜そていろそふ

かのもと篝翁（かゞりをきな）の贅をば。家ゐるしなりさ。此絵に山路に

書きそへ給ふを。まことに侍る。行人桜に見とれゆきかゝりける所

同遊相引歩徐々。靄霧阻山前路虚。

獨木橋邊人不見。松間鐘動夕陽初。

おもしろくと。和歌ありて。かさなりてぞ侍りける

山しのひとつの中のさまことにかくへだ

ゆきかへるとても山あひのかね

大石信濃守

此道の法のてよ。大石信濃守が鼓へ投げし侍りて

韻をのし無行して長き文なれど。二十首の歌をと

まとめおく

初春霞

かすみしねそらの日数をとりそめてかり

ゆきさ一こゑなる春のはるさきそ

帰雁

うすしつるさびしすがきかのえそて

ころもうつこゑゆくうらみひとつ

浦春月

りしはやくうしきのけふりつゝきまと

うつしてかくせる其夜の月

為中丞

さめてこそありしの秋とまちに色も
かはらぬの庭のこゝろし

後朝亟

うきやらし涙の露のあさ枕かし

ありしのいそちそうれて海をも序
大石信濃守か父の二十三回忌とて、の追悼
とひしたよりてあはひかくされど小経と花の枝
よつけて送りけるとて
ちかうしそこ十三とせの花のころ

濱さき

たかくのりしよとをきまつしん
むさし野の末より濱さきしいへるさし侍りかさま
海らいて
むさし野とわかれつゝゆけど濱さきの
さとしそこさけとたつそらかな

甲州

しれてまうしすゝられけるに、指宿と云ちて甲州
へ、ありむさし侍りけるに、帰さみ、ここのわかよろ石歩伎
かりそめ侍りなれど、忘れぐくるとひえてとしつくしける
たかひてすむこゝ海のおもる
すれわるやとよひくこ候ら節
かくて甲州ようらて、出府の川邊まで。雲社

限しられぬ景色にうつりて来りける
あはれなるもののふの杯やある
代々よくわたらぬちからあるとなん
猿橋とて川のふかさはかりしらぬ人の二十余
丈の橋とかけしなり猿はしの絵なり
むかし猿のわたりしをみてかけそめしを
とありけるや猿は申しかたし此橋の猿の形なり
いつまでも世中に此猿の名にたちあつまりて勧進をして渡
りけるとぞいふなしことの由緒なりけることなむ
奇妙なる橋地なり
されどもかけすてられる橋乃

あはれにもかなしきやなびくものそと
白くつらなる雨にて詠じけるかな
たとへばさるさるのなきのかきの猿橋に
人ことぶきとしるしそへつる
ふるの月をみてはかなしきに猿なくや
たまきえたるよのうけのうき流に
此所の景色にまた見る橋にあまをすくひて杯に遁世
の地にあれぬべき

雲霞漠々渡長梯　四顧山川眼易迷
吟歩誤令疑入峡　渓限残月断猿啼

むかし国。ある所の山といふ所にさきはらる。打
かし此所のあはれさけるをとらへて
いまもとてのちまへとりかけてゆくさきに
おもへつらしやとりうらみけると
かし尾といふ所。山寺よ。一宇し給うなれども。此経論の
ひろく渡の代ははる。一そとあのふし給ふへきあきらしきなり。
ありうるわく立ありしはよまうせて。ひつるしたるが。庭上俗
諸よがしめしたれとて栂尾山にて。給ふところ
かけるのひ出家しとうしてとのつくる
ひとりありけよまれてぞあらく
峯の坊といへる。山伏の前よ十日ばかりとくゆかりけるか。

武田刑部

武田刑部大浦の袖よ来りかゝりぎさへつきとらへて
しばらく桂従し給ふれど其縁を云ふのうし
すまじ器量性とつらくすがのそよ
　さくらの花ゆかしの志て林を花とみて
　　うかゝる山のさくられいろう都
又此国の名所のかぎしての磯とてよひかる薬
きりかれど
　さくらのいろも猶一志ほの山さくれく
　　日かけさしてのいそ於もすみは
此二首とつくし給ひき
そのほさしてのいそよそぶくいきものかく二条と
ましてよめる
　くもりなきいろくもしほの山
　　たはふれてやくしひものかく
あかる月夜よ出たまひて桜が木枝よかうし
かれた
　桜かり月さす山辺のたび枕
　　出たまふやことうかのぞん
武田が館にて桜あそび給ふ。宿所へのことわりて
かりよりて祖母の比丘尼の方へ招かれ給ひて
まほしの風情と凝らし給ひさぞのあそびに興を
催らぬ所在に給ひ。一首下されし給ひしく

笛吹川

さきかゝる花のしらなみぜしやとて
秋とこそきけふくがしら良うね

かふのくにゝ笛吹川といふ川あり。高上よりながるゝ
そよかぜにこそしらるゝ竹もそよぎぬ
ふえふき川のながれきゝつゝよ
おなしつきよ。花さかりの比といへる雨と。すこしふるとて
いろもにほひしこえよかてつやまとのて
うつくしき日くれきのふのみぬさと
これより。七覚山といへる。霊地に登山して。衆徒
山伏。あまた歴しとするなり。暁更よりも夜
て。管絃酒宴興をつくしけりき。病後の花。

吉田

やうやうさえ光りくとゝんて
つゝみ枝の花もありけるによ
七川のさゝのしもそくしう那
翌吉山といふて、おきつ国吉田といふ所よりいつろ
ふのふもとまて行けるに、夜も二月十あり
月いとゝすみて、富士の裾をうそうそかれど
こゝしふやこよひの月みつけるかな
富士もうすうよ雲かくれまして
かさ御しゃうはずとゝと除して
一しほのこゝろまさりく気をつけ衣
あるのつてふうてやまのむさしう那

たすらぢ卿のこゝろにおもひやりて
あつまぢのくにゝてぞおもむきし時の
とまりなそらにれとやさしくこそあれ
すぐれたるうたをよみしとぞ佐野のわたりのあはれ
なましいとふなくがのうたもあはれなるべくて
さし人の庭中にたく火のけぶりかなしく
すぐれたるうたけさうやくしけり
三月二日に白川をとやさひさるさの花にてあやし
ちらんの梅のほとりにて佐野のわたりにけり
いかにとぞてあるべくなるをぞいひて
なましかりし佐野のふなはし

こゝは宮慈心院と申ゝ所聖道示現あらたなり。
人々さそひ行ければ社寺のつかさにてまゐりつかまつてまゐる。
これよりいづのさかく川ゆきて川をわたり
すぎて白河二所の関をこえけるにいづく木のもとにく
山桜さきみだれてかけまくもかしこきかたちをもととをりけると。
みなくしくもののけしやとてて
なみにそふ花のすがたをみてしあらし川の
やすらふとみすらにすまさんしれらん
あらしこゝろとあふ雨のふりける中より
よのすぢうつしみやうとして
みてしみてゆるさうのやま

白川入道

しら川のやどのこ木の山ざくら
ちるかゆきかとみゆるかぜのしも

志ら川入道。書あやまりとくまずてもあけもの年よりて
とて礼をも身をも定めて孫とよりてもたゞ敬く礼義
をいさしきかうの入道。歌道数寄みちに
へこしきかにてはゞひつくしよく
たらよりも一樹のかけみちをさうしとて
ちかうしものあるとなりし

ものとたちて矢つきといへる所へおもむき侍りける
ありこれは那須の与市まうでゝ侍り兜をこめられ
たるにぞゆかしく覚えてぐりていひつゞくる
たちよりて見侍りけるに木の下の
こ所よりて侍るにをしゆき
このあたりの人は所謂無弥して社頭に生綱大きく
宿所ありて発句とこひ侍りければ
ちりかゝるぞあはれのそこみ家木より
ゆくは霞とたちて行くの里のよといふ所へ侍る
無き物をきかくのけふりのたつかたへて
たひごろもよしうまでゆく志賀の里に

きつね川

けふかうさびしきゆゑぐゝくの郷
きつね川といへる所へゆきてまゐりて見れば
さと人のとりはらひけん祠あり
よそ見あやしきことにきつね川のよ
柳木の柳といへる所はいつはりの柳ぞくちて
そのあとよりつきたる文字はむかれて柳あそれぞ
見ちかくのくち木のやうなるいはんとたゞえて
こけのころもうつろひをそふ所
たよりて林の森といふのでいはれあるさまぞやし
侍りやうしく花のちりすきさがりといひて
ちるさまなとたゞ一時の物語して

かぜにおもしろくて秋のなり
かくて人々これよりの山ともいふ所を過て矢つるの
別当坊に一夜宿りて
あつかしややつさの山をみさくれば
そらのひかれてとくゆくかな
あまたより田村といへる所に宿るころはうつり
さ夜くの森ともおほかりしゆふのけしき散るを
ねぶるとしつもりてあさかれぬれて
たびのくらしてかゝるにをさゝかの
あさかれぬきそもまもかくれて
あさかの山にてよめる
ちりつもる花にうつれて浮舟山
あさくこそ見えね山の井のみづ

阿武隈川

あふくま川とて名所にて
かくしつゝあふさき人よいつはりて
あふくま川のあふせありやせん
志のぶの山といふあたりは山中にて行々これより海道へ
そ十里ばかり行めぐりたる
うつりとき山のうすきの夕ぐれ
なかなかにくれる志のぶのやまかな

衣の関

衣のやまをすぎてよめる
こちはくのこゝろは衣やまさとさそふれど

うすまやいく世たちつゝ採りん
たけくまの松かけにたちくだちよりてふりぬる
身のうくひかりとおもひのよそへて侍る
いつくよりわかまもりひきたけくまの
由つことうしよ歩そふりよけは
すゑの松山をかよふるあやうしてなきをみるしと。
末よりうくるとおもひつけていつのなみぞるも
すゑつかうぬらんとおもひのなびて
なりそてやすゑの松山かどしらく
こゆらてたびのりあとみゆる
又あるし下まて

人まことよおもひもちつゝひあれや
ころあらまし此すゑのまつ山
みちのくのにて實方朝臣の墳墓とて志るしめりく
ちかるあとそぞ好らしさねと係しけるふはこちそ。
おもひいでゝよめは
さつき雨のそらとおもひいでゝ
みちしるべともたびころろ那
實の法名とらへる形とてするみよ。枝むしの様らけ
まくかさしおも坂の山坂おもひのてゝまそて
あふ坂の山のそなね枝むしりし
たちまちやさきの法名のとそへむ

宮城野

松島

かくて宮木野といふ所に一しきり雨ふりければ立よ
らむ木かけもなくてしとゝにぬれつゝあゆむに

木の本に雨やとらせん宮城野や
みさふらひやも人しなければ

おくれゆくこゝちはかりしとろにあゆみて松島へまいりぬ
まことに示しとゞまりて松島といふ浦へ
島々の風景詞にもをよひかたく松原ありし
あまたの島々をこえてゆき所々なかめ行くれ
このしまのうへにあそひてまつり島や
おしまぬ人なきかゝる所
波うちよせつゝ夜もすから夜つくしみてあかして

おなじ風流ありけるとなれし
ゆきし海たゆみひともしらぬ
いつれの所にかくあふさか
うきもなき身のうしほにしくをりかなて
まつしまや松のくれなゐきくまて
をみのふるえにちりしかは海
浮しの景色ををかしいと見えて
名とりあみつしるとおもひ下さむ
ともかへり来る海のくまをも
ところの様なと書きとめて
みちのくもこの海をうつらさぬれや

みちのくにありといふなるところさへのみて
名とり川にてよみける二首
人しれぬ埋木なくし名とり川
うもれてのみやすぐしてんとや
いつの世にあらはれぬへき名とり川
なかくきえてや流るゝ埋木

宗祇傳

宗祇者宗充之子也。姓ハ中臣氏ハ飯尾。其先世居紀州。母藤氏。憂無嗣。欲得子。一百日祈玉津島明神。滿期之夜。夢玉子入口而妊。閲十有三月而誕。時稱光帝。應永二十八年歳在辛丑。東則念自也。宗祇自童丱。甘和歌如飴。嗜之不厭聰就叔父宗砌。學習累年。頗長連歌。嘗堂喜愉談夢呑玉孕之事。宗祇聽焉感為是祥瑞。自稱種玉菴。杳聞心欲在神維振和歌之名。景望不止。乃由南紀而

遷北京。為北京人。盤結草菴千石倉之長谷。師事心敬。慣和歌及老荘。粗得通利撮老荘之心。自呼自然齋。時東下野守常縁。承嗣和歌之傳於父野州益之名翼遠。坐法寘役東關。宗祇知非其罪歎和歌之傳之廢。文明三年。發長谷行關左。親炙常縁。孜孜請益和歌之道。常縁感其誠至而傳古今集。自萬葉集至新續古今集。紬繹其中奥義。僉以授焉啓迪伊勢源氏狹衣下紐等物語之祕傳。稇束嚼焉。祇謝而歸京師。往來五年

肆詩參禪間衆黠雲禪師鉗鎚終稟許
可得意之後不定居處爲浮萍客遊山
藪林野間方吟哦而雨至雨濡其衣不
知落魄不羈不凡旅泊爲家舍四海爲
兄弟西限九州而有築紫紀行之作東
際奥州而有回國雜記之書每尋名所
舊跡勝地靈區凡足跡之到處巣興而
作詩歌其徒麕聚影隨就中受其傳者
肖柏素純宗長宗碩等也宗祇有美鬚
好名香燒而熏鬚酷似愛鬚人問其所
路訓曰我詑愛鬚燎香熏鬚則其氣久

留氣氳在鼻孔下不斷馥餘熏耳祇及
老邁憊息越之後州二載宗長至孝欲
省宗祇出駿州適越後祇深喜其孝念
長不獲還翌年祇話曰欲濃州有舊識
往彼而終老長聞察祇之情不可止扶
持而去越後道歴草津伊加保要浴温
泉而治沉痾浴畢赴途途中病瘁發寄
宿相州湯本郵邸暫展臥具就枕假寢
夢聞定家卿之誦式子内親王之歌覺
後譚旃盍然脱去享年八十又二時後
柏原帝文龜二年歳舍壬戌七月晦日

也。其明宗長宗碩素純等。擔棺越箱嶺葬駿州桃園定輪寺。栽松于墳墓上。未期之事。詳出宗長所筆宗祇終焉記

賛曰。好言自口。莠言自口。巧言令色之者。作詩歌。詩歌為國而惹嫣婦。嫣婦响之。誰黔首。嘉言善行之者作詩歌。詩歌為導惹賢友。賢友使之曉之后好嘉之為言。逐日而好莠巧之為詩逐日而莠詩歌之名同。而其心別誑惑徒曾不知好醜。詩歌之心別而其名同。曉悟輩乃能知休咎。宗祇之詩歌。好而無醜。宗祇之言行休而無咎。長張華之鬚。而遭彼間把愛梅詢之香。而異此旨趣。風流哉。宗祇叟。風流哉。宗祇叟。享齢第幾何。以一添九九。矍鑠不哽噎。保得此眉壽。人焉廋哉。傳之不朽。人焉廋哉。傳之不朽。

山尾至源公茂
求之

友朗文庫